

第 12 回世界核医学会印象記

萱野 大樹
Kayano Daiki

1. はじめに

2018年4月20～24日にかけてオーストラリアのメルボルンで第12回世界核医学会（12th Congress of The World Federation of Nuclear Medicine and Biology）が開催されました。ビクトリア州の州都であるメルボルンは、オーストラリアの総人口の約20%の480万人が住むオーストラリアで第2位の人口を有する都市で、毎年テニスの全豪オープンやF1グランプリ等の世界的なイベントが多数開催されています。近代的な街並みの中に文化的な建築物が多く残っており、英国のエコノミスト誌による調査では2011～2017年まで7年連続でメルボルンが世界で最も住みやすい都市に選ばれています。

2022年9月には絹谷清剛先生を大会長として第13回世界核医学会が京都・金沢で開催されることが決定しており、筆者は第13回世界核医学会の実行委員・プログラム委員を拝命しております。日本



写真1 日本核医学会ブース前にて

で開催される次回大会を実りある大会にすべく、調査も兼ねて第12回世界核医学会に参加いたしましたので、筆者の視点からの本学会の様子についてご報告させていただきます。

2. 学会概要

学会場となった Melbourne Convention and Exhibition Center (MCEC) はメルボルンの中心駅であるサザンクロス駅から徒歩圏内のヤラ川沿いに位置し、周辺には宿泊施設や飲食店が豊富に揃っており、国際学会を開催するのに非常に恵まれた場所でした。街中にはトラムが張り巡らされており、中心部は無料で乗車が可能であったため街中の移動が非常に便利で、学会期間中は多くの参加者の方々がトラムを利用して MCEC に来ていました。

今回の学会では78の国々から約2,000人が参加し、学会期間中は会場内だけでなく MCEC 周辺の飲食店や川沿いの通りでも多くの参加者の方々が議論、談笑を交わしていました。次回の第13回世界核医学会が日本で開催されることもあり、日本からは150人以上が参加し、開催国であるオーストラリアに次いで2番目に多い参加人数でした。

学会初日は関連学会主催の Satellite Meeting に続き夕方から Opening Ceremony, Welcome Reception が行われ、2日目以降に6会場（3日目のみ7会場）での口演と、ポスターセッションが連日行われました。口演は各分野共に教育講演的な内容のセッションが豊富で、各分野の世界の現状を効率よく学べるプログラムでした。2～4日目の昼食後に行われたポス

表 1 分野別のポスター発表数

分野	発表数
Oncology	176
Molecular Imaging	81
Physics	65
Neurosciences	58
Cardiology	52
Radionuclide Therapy	52
Radiochemistry	44
Endocrinology	35
Innovation	29
Infection & Inflammation	22
Technologist	22
Paediatrics	15
Other	53
Total	704

ターセッションでは、合計 704 の演題があり、連日活発な討論が交わされていました。分野別では、Radionuclide Therapy に関する発表が Cardiology と同等であり、Oncology の分野でも Theranostics 関連の発表が多数あり、核医学治療の世界的な盛り上がり を反映した演題の内訳でした (表 1)。 α 製剤、 β 製剤共に創薬、基礎実験から臨床に至るまで様々な発表が行われており、ここ数年のトピックである前立腺特異的膜抗原 (Prostate specific membrane antigen : PSMA) を標的とした治療薬、診断薬に関する発表が口演・ポスターセッション共に非常に目立ちました。開催国であるオーストラリアでは ^{177}Lu -PSMA による前立腺癌治療の臨床研究が順調に遂行しており、日本の核医学治療を取り巻く現状とのギャップを改めて痛感しました。筆者は ^{131}I -MIBG 治療に関するポスター発表を行いました。ペプチド受容体放射性核種療法 (Peptide receptor radionuclide therapy : PRRT) の発表も多くみられました。口演ではドジメトリー (dosimetry) に関する発表も充実しており、撮像機器及び解析ソフトウェアの近年の進歩によって、ドジメトリーを用いた臓器毒性の予測や治療効果予測が実臨床でもかなり簡便に行えるようになっており、核医学治療の分野の盛り上がりは今後も長く続くことに確信を持ちました。

ポスター会場と併設された展示会場では、セッションの合間に 1 日 2 回の Tea Time (Morning Tea,



写真 2 Gala Dinner にて

Afternoon Tea) が設けられていました。毎回の Tea Time でマフィンや紅茶が振る舞われることもあってかポスター会場と展示会場は連日多くの参加者で賑わい、会場が閑散としないよう工夫が見受けられました。日本核医学会のブースも多くの国内外の先生方が訪れられており、第 13 回世界核医学会への関心の高さを伺うことができました (写真 1)。

4 日目の夜には MCEC 近くのホテルで祝賀会 (Gala Dinner) が行われました。1,000 名を超える参加者が着席形式で行うパーティは圧巻で、ワインと料理を心地良く楽しみました (写真 2)。ステージ前にはダンスフロアが設けられ、筆者も少し参加いたしましたが、日本のご高名な先輩先生方の華麗なステップと普段のお姿とのギャップに驚き、非常に楽しい時間を過ごさせていただきました。最終日の Closing Ceremony では、次回大会長の絹谷先生への引き継ぎが行われ、大会が終了しました。

3. おわりに

今回の学会は、全体を通して教育的な内容も多く、知識を update するのに非常によい機会でした。また、Tea Time や Gala Dinner 等も工夫が凝らされており、学問だけでなく国内外の先生方との交流を広める場としても非常によい学会であったと感じました。次回の第 13 回世界核医学会は、1974 年に第 1 回世界核医学会が東京・京都で開催されて以来、48 年ぶりの日本開催となります。今回に負けず劣らずの素晴らしい実りある学会になることを祈りつつ、締め の言葉とさせていただきます。

(金沢大学附属病院 核医学診療科)